

幼児期の竹馬あそびと運動能力について

1. 竹馬歩行と運動能力について

○鈴木雅裕（宇部短大幼児教育），大田三枝子，上野軍司（宇部短大付属藤山幼稚園）

I. はじめに

日本の代表的な伝承あそびの一つである竹馬は、現在でも国内の多くの幼稚園・保育園で実施されている。幼児期の竹馬あそびは、あそびの伝承だけが目的でなく、平衡機能などの調整力の向上に役立つものとされている¹⁾。

幼児の竹馬あそびと身体機能については、首藤ら²⁾および笠原ら³⁾の研究があり、竹馬にのる技術レベルと握力・平衡機能などの運動能力との間に有意な相関が見られたことを報告している。

竹馬あそびの第一段階として、竹馬にのって歩くこと（以下、竹馬歩行）があげられる。この竹馬歩行を行うためには、通常の歩行と異なり、調整力の中でも極めて高度の動的平衡性が必要と考えられる。

したがって、竹馬に安定してのることのできる幼児とのることのできない幼児では運動能力に差があると考えられる。

本研究は、幼児の竹馬能力と運動能力との間の関係を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1) 対象はF幼稚園年長組の男児45名と女児31名の計76名とした。

2) 測定日時：

- (1) 第1回竹馬能力測定 昭和61年 9月14日
- (2) 運動能力測定 同年10月15・16日
- (3) 第2回竹馬能力測定 同年11月20日

竹馬歩行は第1・2回の測定時に、竹馬けんけんは第2回の測定時に行った。測定用の竹馬（全高135cm、横木の高さ30cm）は市販のものを用いた。

3) 竹馬能力測定方法：

(1) 竹馬歩行（直線5m）と竹馬けんけん（直線1m）を行わせ、それぞれの動作を各児ごとに側方よりVTRおよび35mmカメラを用いて撮影した。

(2) 首藤ら²⁾の結果を参考に定めた竹馬達成基準（表1）にしたがい、VTRをみながら3名の保育者が各児の竹馬能力を6段階に判定した。

4) 運動能力測定：

- (1) 体格：身長(Ht)，体重(Wt)の2項目

(2) 運動能力：棒上片足立ち(右:OBR,左:OBL),長座体前屈(SR),上体そらし(SU),体支持続時間(TD),立幅跳び(SLJ),ソフトボール投げ(ST),反復横跳び(SS),25m走(25m),握力(右:GSR,左:GSL),背筋力(BS)の12項目

表1. 竹馬達成基準

A	: B以上のことができる
B	: 安定して5m以上の歩行ができる
C	: 安定していないが5m以上の歩行ができる
D	: 5m未満の歩行ができる
E	: 2～3歩の歩行ができる
F	: のれない

III. 結果

1) 竹馬能力測定

竹馬能力を竹馬達成基準によって判定した結果は次のとおりであった（今回は竹馬けんけんを歩行とは別に判定したのでA群に属する児はいない）。

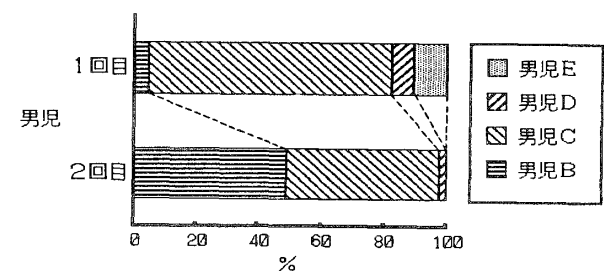


図1. 竹馬歩行の判定結果（男児）

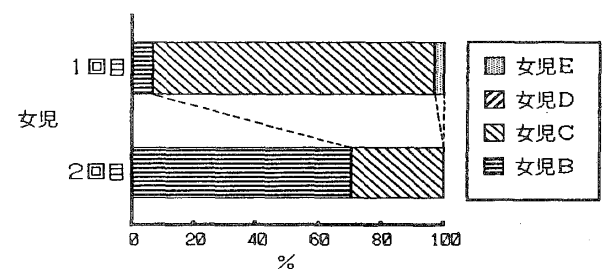


図2. 竹馬歩行の判定結果（女児）

第1回竹馬能力測定において、男女児ともに竹馬に

のれないというF群のものはみられなかった。

また男女児ともに、第1回に比較し第2回ではB群に属するものの割合が高くなり、逆にC・D群の割合が低くなっている。これらの変化は、男児においては5%水準で、女児では1%水準で有意であった。したがって、約2カ月の間に幼児の竹馬能力（以下、竹馬歩行能力）は著しい伸びを示しており、調整力の発達にも影響を与えたとと思われる。

これらのことは、F幼稚園では竹馬あそびに昨年度から取り組んでおり、いつでも幼児が竹馬であそぶことができるように配慮するなど、積極的に保育活動に竹馬を取り入れた成果と考えられる。

男女児間における第1回と第2回の同じ段階の比較では、いずれも有意差はみられなかった。

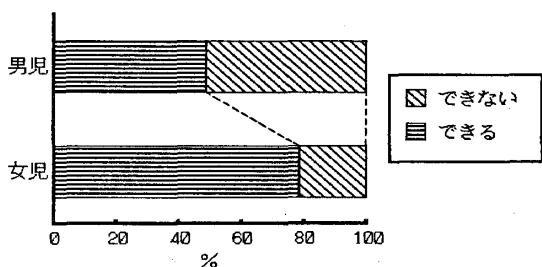


図3. 竹馬けんけんの測定結果

竹馬歩行よりも困難と考えられる竹馬けんけんの測定結果を図3に示した。

幼稚園の中では、女児よりも男児の方が竹馬を使用する時間が長く、複雑で難しい動きを伴うあそび（竹馬サッカーなど）を行っているが、男児に比較して女児の方に竹馬けんけんのできるものが5%水準で有意に多くみられた。

表2. 竹馬能力測定結果（男児）

第2回	ランク	第1回					計
		B	C	D	E	F	
	B	0	2	17	1	1	21
	C	0	0	15	2	3	20
	D	0	0	0	0	1	1
	計	0	2	32	3	5	42

数字は人数

男児では第1回にいたE・F群の幼児が第2回ではいなくなり、全員が上の段階に上がっている。上がり方の著しいものとして、FからBへと4段階上がったものなど、2段階以上上がったもののがかなり多くみられる。毎日幼児を観察している保育者による判定であるので、信頼性は低くはないと思われる。

今回の研究では対象者数が少数であるので、すべての群の間について運動能力の差異を検討することができない。そこで、対象者数の比較的多い第1回のD-F群、第2回のB-C群について、平均値の有意差検定を行った。

表3. 平均値の比較結果

	Wt	SU	SLJ	SS	25m	GSR	GSL	BS
第1回 D-F		***		**		**	**	
第2回 B-C	*	*	*		*	*	*	*

*:P<5%, **:P<1%, ***:P<0.1%

第1回のD群とF群の間において有意差が認められた項目は、上体そらし、反復横跳び、握力（左右）、背筋力の4項目であった。第2回のB群とC群では、体重、上体そらし、立幅跳び、25m走、握力（左右）、背筋力の7項目であった。共通して有意差が認められた項目としては上体そらし、握力（左右）の3項目にすぎなかった（表3）。

首藤ら⁴⁾も竹馬能力と握力との間に相関関係を見だしていることから、竹馬歩行能力と関係がある要因は静的筋力と考えられる。

しかし、調整力の構成要因である平衡性の測定項目では、竹馬歩行能力の上位群と下位群との有意差が認められなかった。

以上のことから、竹馬歩行能力に優れている幼児の運動能力は優れていると考えられるが、調整力については明らかではなかった。

今後の課題としては、調整力の測定項目を検討し、竹馬能力と調整力の関係を研究することが考えられる。

参考文献

- 1) 武藤芳照, 子どもの健康とたのしい運動, 築地書館, 1985. Pp.157.
- 2) 埜邨敬和ほか, 体育あそびにおける竹馬あそびの効果と意義について(その2), 日本保育学会第38回大会研究論文集, 1985. pp.680-81.
- 3) 流王 農ほか, 保育所における体力づくり研究9 - 竹馬 -, 日本保育学会第38回大会研究論文集, 1985. pp.318-19.
- 4) 首藤和志ほか, 体育あそびにおける竹馬あそびの効果と意義について(その1), 日本保育学会第38回大会研究論文集, 1985. pp.678-79.